



# 羅針盤

2015年度 第7号  
都立豊多摩高等学校  
進路図書部

2015（平成27）年7月17日発行

## 目標へと向かう長い道のりの一部

ウィンブルドン開幕前夜、NHKが、錦織圭の特集番組を放送した。終盤で、コーチのマイケル・チャンが、若い日本人選手の現状を説明した。

ジョコビッチと圭の差は、実は、それほど大きなものではないと思う。差があるとしたら、それは自信だ。圭は、トップ選手と戦うときに、もっと自信をもつべきだ。全米オープンの際の気持ちを思い出してほしい。世界一のジョコビッチに勝つことができたんだから。またそれができるはずなんだ。

(NHKスペシャル「錦織圭一頂点への戦い」2015年6月28日放送)

ノバク・ジョコビッチは、世界ランキング1位、今回も優勝した。が、リスペクトをしても、自分の実力に見合う自信をもて、というのである。茂木健一郎は、松岡修造との対談で「根拠なき自信をもて。それに見合う努力をせよ」と述べていた（『SWITCHインタビュー達人達』NHK-Eテレ、6月13日）（スイッチインタビュー）。実力は後回しでもよいのである。「根拠なき自信」は、受験勉強の必需品。不安に駆られていたら、身につくはずの知識も身につかない。自信をもて、根拠は後からついてくる。

番組の最後に、そのジョコビッチが、錦織が王者になる条件を見通した。

錦織が王者の心を手に入れるために必要なのは、敗北をどう受けとめるかだと思う。私も、飽きるほどの敗北と失敗をくり返してきた。簡単なことではないが、敗北を目標へと向かう長い道のりの一部と思えるかどうかの差だと思う。そして、それはすべて自分の心のもち方次第なんだ。

(同番組)

夏休みは、文武に限らず、切磋琢磨のときである。敗北やスランプと向き合うこともあるだろう。目標へと向かう長い道のりの一部と考えて歩み続けてほしい。努力を放棄してはいけない。

ただし、求められる努力の内実は、かんなんしんく 艱難辛苦やがしんしょうたん 臥薪嘗胆の忍従を強いるだけではない。

## 知好楽

女子サッカー日本代表監督、佐々木則夫のことばが思い出される。チームは、先日のワールドカップで準優勝した。アメリカとの決勝戦前夜に放送されたインタビュー（TBS「S☆1」2015年7月5日）で、佐々木は勝負のあやを「知好楽」と説明していた。『論語』に依拠したことばである。「擁也」編に「この之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず」（宇野哲人『論語新釈』講談社学術文庫、165頁）とある。楽しむ者が一番強い…。正鵠を（物事の急所）を得るだけでなく、一流監督の琴線きんせんに触れた点が興味深い。

勉強も本来、娯楽の一つだった。江戸時代の国学者、本居宣長の弟子の多くは、出世したい若者ではなく、功成名を遂げて隠居した豪商たちだった。彼らは、内発的な好奇心に駆られて、勉強に取り組んだ。が、学校制度が確立すると、将来の目的と結びつき、競争や強制という外発性を帯び、娯楽という本性からかけ離れてしまった。『舞姫』まいひめ（森鷗外）の主人公が立った「学問の岐路（=分かれ道）」は、そういう、まいり 求められる学問と求める学問の乖離にきざしている。本来の価値に気づかないまま、強制された勉強に、本意と無関係に取り組まなければならなくなれば、自己疎外に結びつく。結末が学力不振にとどまれば、まだいい。

ではどうするか。処方箋は決まっている。内発的な主体性を取り戻し、勉強の本質的な娯楽性に気づくことである。ノーベル賞受賞者は、異口同音に「好きなことをしただけ」と言う。被爆直後の長崎で救命活動

に奔走した医師、永井隆（1908～1951）は「父も母も一度だって私に『勉強しなさい。』といったことはなかった。私は父と母とが、毎夜いかにも楽しそうに勉強しているのを見て、勉強は楽しいものだと思った」（片岡弥吉『永井隆の生涯』（中央出版社、1961）14頁）と回想している。

が、勉強の楽しさを教えることはできない。生きる意味と同じで、各人固有のものだから、自分で発見するしかない。私たちには、経験を語るか、手がかりとなりそうな具体例をあげるくらいしかできない。

動物行動学の日高敏隆（1930～2009）の、ラジオ番組で聞いた話が忘れられない。動物行動学は、生物学から枝分かれした分野。解剖や分類ではなく、観察を方法とする。——幼い日の発見である。虫を追いかけてばかりいた。あるとき、「チョウの道」に気づく。アゲハチョウが、いつも、人間の道路の同じ側を飛んでいくのだ。捕虫網を持って追いかけると、いつも同じところで道を渡る。複数の個体が同一の行動をとる。少年は、チョウにも道がある、と思う。観察が始まる。アゲハが飛ぶのは、木の生えている側。反対の畑側は飛ばない。アゲハの幼虫は、柑橘類の葉を食べるから、ミカンやカラタチの木が生えている方が、成虫同士も出会う確率が高い。モンシロチョウが好きなキャベツ畑も、アゲハの心はとらえない。柑橘類は陽樹。日陰を嫌い、日なたを好んで生育する。日陰で繁茂する陰樹ではない。アゲハは、日の当たる木々の上を舞って行き、日陰にさしかかると、道路を渡って日なたに移動していたのである。いま日が当たっているところは、少なくとも一日一度は日の当たる場所。つまり陽樹の生える場所を飛ぶことになり、羽化した異性に会う確率も高くなる。闇雲に飛んでいたわけではなかったのである。少年の素朴な疑問が、一生の研究に繋がった。（ラジオ番組からまとめたが、「チョウの道」については、『チョウはなぜ飛ぶか』（新版）岩波書店、1998）参照。）

楽しそうだろう。私の知る範囲では、好奇心が研究に昇華する、最も羨ましいエピソードである。君も、ただ難行苦行に耐えるのではなく、勉強が内包する楽しさに目を向けてごらん。スランプに陥らないための対策になろう。「すべて自分の心のもち方次第」なのである。将来にめざすべき道も拓けてくる。

今年も、入試改革の実践が報告されている。ICUは、入学後の学生満足度ナンバーワン。感度のいい大学である。受験生の立場ではなく、改革者の視点で読んでごらん。

#### 授業への適性 柔軟な力見る——新しい入試導入——（国際基督教大教養学部長・伊東 辰彦さん）

知識だけでなく、活用力や思考力も合わせて総合的に評価する。そんな方向性で国が大学入試改革を進める中、国際基督教大（ICU）は今年、さまざまな力を見るための新しい試験を導入した。

2月にあった入試から、「総合教養」という試験を始めました。大学で行うような講義を約15分聴いた後、関連する文章を読んで問題を解く形式です。国語、地理歴史、公民、理科、外国語の要素が含まれた問題です。講義や文章に答えが隠れていることもあれば、自分の知識と合体させて答えを導き出せるものもあります。

今年の入試前に公表したサンプル試験は、ワインがテーマでした。例えば、文章に登場したワイン産地の国名をヒントに、地理の知識を組み合わせるとわかる問題。ワインの製造方法に絡めた化学反応式の穴埋め問題は、式自体を暗記していなくても、式の左右が「同じ」になることを理解していれば、答えにたどり着けます。

ICUの授業では、特定の分野だけでなく、文系理系の枠を超えて知識を総動員して問題を考えます。同じ考え方で総合教養の問題も作ります。知識を使って必死に解こうとする力など、授業への適性をみる狙いがあります。適性を確認できたかどうかは今後の学生生活を見ないとわかりませんが、楽しんで解いた受験生が多くいました。

いまは受験業界がさまざまな対策を提供していますが、受験生には対策をしないで欲しいのです。普段の勉強や生活の中で、力を蓄えてほしいと思います。社会に出たら複合的に絡み合った問題に直面しますが、「習っていないからできない」ではだめ。柔軟で総合力があり、挑んでいける人を育てたいです。

「学びを語る」（聞き手・佐藤恵子「朝日新聞」2015年6月18日（木）34面）

「知好楽」を実践している生徒を求めているのである。君も、勉強を楽しむことだ。